No33　ワープロ　AI01

義髙　亙

　特支教育に必要な物は本物の評価の自信だと考えています。
そのためには特支の枠を越えて平等に競争し、評価を勝ち取る場面が不可欠だと思います。その舞台の一つがグラフコンクールでした。
　通常学級の生徒が自分の制作能力を発揮して提出したグラフコンクールで特支教育を受けている生徒が競いより高い評価を受ける。そこでつける自信と自己肯定観は得難い成長の機会となります。
課題もあります。支援教育を受ける子供たちは支援をすべき部分があります。これを何で補うかという点です。私はこれを支援教育用 AI、個人向けに調整した自作ワープロ、そしてドローソフトで補う事にしました。
　AI と各種アプリで補えば他の子供たちと競い合う制作活動が可能なのです。
このアプリ群は文化庁芸術祭の受賞やアジアでの受賞、そして国内では教育財団理事長賞や NTT 社長賞など幾多の賞を受賞しました。AI については専門誌に掲載され、ベースのプログラムを CD で全国配布し、その後、各分野の AI 開発に活用していただきました。2000 年当時の AI ですので 2020 年代にはもう時代遅れです。ワープロやドローソフトについてはベースの物を個人向けに調整して子供たちの制作に生かした物があります。また子供の身体状況に適応した疑似タッチパネル等の入力機器を開発して活用しました。入力機器自体についても賞をいただきました。
　子供たちはこれらのアプリ等を活用してグラフコンクールで賞を受賞することが出来ました。
この活用した事例について後で提示できれば、と思います。

------- END ------